

広島俳句倶楽部

令和三年十二月作品集

松江の一日

亜矢

十月、リサイタル鑑賞のため、松江へ行きました。移動時間の方が、松江にいた時間より長かったのですが、素晴らしい演奏に、貴重な日となりました。尚、ここていうオルガンは、パイプオルガンのことです。

低き山に大く短き秋の虹

湖沿ひをバスの走りて天高し

新蕎麦を駅の小きな店で食ふ

オルガンとピアノ行き来の秋日かな

十月や歌手の巻き毛のよく揺れて

オルガンのホールに響く爽やかな

ソプラノのアヴェ・マリア聞く秋の星

純白の歌手のドレスや冬近し

宍道湖の波たつてゐる秋の暮

秋時雨土産を抱へバスに乗る

《作品鑑賞》

高尾ひとみ

亜矢さんは、これまでオペラをテ・マとする作品など、日頃から音楽の句を多く作っておられます。今回もリサイタルを中心に、その前後の小きな旅を素直に自然体で詠まれています。日常生活を十七文字にする、と言う作者の秋の一日を楽しめる作品です。

オルガンのホールに響く爽やかな

よく音の響ホールのオルガンの音が満ちていきます。爽やかな秋の風が吹きわたるようです。

ソプラノのアヴェ・マリア聞く秋の星

人の歌を間近に聞くと心が震えます。特にアヴェ・マリアは、どの作曲家の歌も深く心に届くのです。目を瞑って聞いていると、澄んだ秋の星の瞬きを感じたのです。

純白の歌手のドレスや冬近し

ソプラノ歌手の美しい巻き毛、白いドレス。雪がちらちらと舞っては消えてゆく。雪の女王を思いました。

秋の広島城を訪ねて

美耶

菊の祭典「広島城大菊展」。新聞の見出しを見て、亡き父も毎年、大輪の菊を咲かせ楽しませてくれた事を思い、どんな菊に出会えるのかなど、楽しみに広島城へ出掛けました。城内の紅葉も見事ながら、秋晴の休日と重なり、護国神社では七五三のかわいい姿にも出会い、過ぎし日々を思い出しながらの秋の一日でした。

二の丸の先の城内さやかなり

石垣に沿うて吹く風秋深し

城内に香の漂ひて菊花展

聞こえ来る常連の声菊花展

菊を見て砂利を踏む音昼日中

秋晴の濠に城壁映りをり

外濠に映りて動く鰯雲

秋麗の鯉のゆつくり泳ぎをり

紅葉のひと葉の鯉へ流れけり

一束の菊を求めて帰ったり

《作品鑑賞》

高尾ひとみ

美耶さんは、日頃とても繊細な花の句を作られる方です。今回の特別作品は、菊花展の開かれる広島城の秋を詠んでおられます。どこから入られて、どのように回られたのかと想像しながら、一緒に広島城を歩いているように感じる作品となりました。

石垣に沿うて吹く風秋深し

風は、石垣に沿って歩く作者に吹いています。その風が少し寒さを感じさせたのでしょうか、「秋深し」という季語でその微妙な温度が伝わってきます。

菊を見て砂利を踏む音昼日中

菊を見ていると、ただ砂利を踏む音だけが聞こえてきます。「菊」という季語と自分の足音だけを詠むことで、菊の香りに包まれて、その香りの只中に居る作者を感じました。

一束の菊を求めて帰ったり

お父様が大輪の菊を作っておられたことを思いながら、菊を買われたのでしょうか。お父様との思い出の中の菊と買い求めた菊を重ねながら、家路につくのです。

川は涸れ道はしばらく続きたる

一枝の雲の下鹿啼きにけり

山々の連なりて吹く秋の風

秋川の俄かな音に驚きぬ

百合の木の黄葉のどれも鳴つてをり

石路の花しばらく道の人途切れ

山茶花に少しく雨のかかりけり

夜の闇に紛れてゆける木の葉かな

葉を落すその木と吾は語るなり

芸北の雲のまばらに冬初め

佐保光俊

山茶花の咲き始めたる日差かな

海風に黒松の鳴り冬立ちぬ

群青の空に残つて寒の月

まだ低き朝日に水鳥の飛んで

蛇の来てしばらく留まる花八つ手

プラントー日向に並べ冬浅し

短日のメニューを灯すレストラン

叔父叔母と母そろふ夜の冬灯

寒月の左右近くに宵の星

冬星や長髪束ねチエ口を弾く

村上正人

山菜蕨の実に木洩れ日のあたりたる

すぐ横に来て止るなり秋苗

秋の水隔てて鴉鳴きにけり

この枝にまた戻り来て耐鶺鴒

木犀の香りの方へ歩みたる

湖を見下ろす丘に秋惜しむ

皂角子さいかいちのふれれば散れる黄葉かな

散り敷いて紅葉の道となりけり

茶の花に真上からよく日の差して

山門をくぐれば石路の咲いてをり

高尾ひとみ

丸き実のハンカチの木にぶら下がり
 ばらばらと音立て桜紅葉散る
 散紅葉分けつつ鯉の泳ぎけり
 吊り橋をゆつくり渡る冬はしめ
 小春日や砂州に佇む鷺一羽
 雨粒の水輪をくぐる冬の鯉
 溪流のしづきを浴びて三十三才
 高層に灯りがともり冬の朝
 冬の日に向きて佇む川鷄かな
 堀へと川鷄飛び立つ冬の暮

秋沙

落葉掃く人に尋ねる集会所
 裏庭に音立てて降る冬の雨
 法事済み見つめてゐる花八つ手
 縁に座し木の景時雨を見て飽きず
 鳥の羽根拾うてゆける枯木道
 目の前を綿虫の飛ぶ家路かな
 冬晴の山裾ひとり歩きけり
 初雪の隠してしまふ月の海
 わが髪にきて解けにけり雪一片
 笹鳴の時どき近く山の道

あざみ

向ひ合ひインコのしやべる小春かな
 くり返しシヨバン聴きたる冬の夜
 靴を置き弁当渡す冬の朝
 弁当箱隅々洗ふ日短
 泣きながら登園する子師走空
 焼き芋屋の声の再び近づきぬ
 片手袋引き出しの奥にしまへり
 暮早し父に抱かれ泣く子かな
 船内で友と会話の冬の晴
 バイオリンの音高々と十二月

亜矢

午後の日に大きく見ゆる紅葉山

生まれたと甥の電話や檻紅葉

黄葉の枝より鳩の見下ろせる

照葉して庭に立ちたる花水木

柿紅葉にはかに鳥の飛び立ちぬ

河口まで芒の土手の続きたる

流れゆく葉を見てゐたる秋の水

引越しの手伝ひ滑んで秋の暮

秋日差す琵琶湖の先の伊吹かな

風や時折り海に日矢の射し

井藤希

警策の音の合間や冬の鴈

岩間より水のこぼれて落葉打つ

初雪とやうやく気づく宿の朝

寒風や瀬戸の小島を歩きをり

源は青き淵なり冬の川

いっよりか老女一人で大根引く

寒苗歩こう会の列づく

冬の月長距離バスの並びたり

実万両山川の音聞こえ来る

冬苗竿を納める堤かな

栄吉

初冬の嶺へ移りぬ俄雨

寺町の路地行けば飛ぶ雪ばんば

冬木立鴉の声に振り向いて

北風の山中にある灯りかな

万両に木洩れ日にして鳥の声

茶の花の微かに香る朝日かな

菰巻いて天边にゐる鴉かな

郊外の鉄路を歩き冬の鳥

裸木の影を横切り鬼ごっこ

崖下に潮の烟りて水仙花

暁子

稽田の濃尾平野を歩きたる

冬近し薪を軒まで積みよぐる

散る紅葉いくども母は掃き集め

神無月また薄墨の景書来て

空木岳尾根際立たせ冬日差す

木守柿立山白く見えにけり

聖樹かな駅から人の声響く

くぐもれる受話器の声や外は雪

雪嶺に澄みきる川の早きかな

畑返すあたりに水と根の匂ひ

新庄憲彦

父母の写真見てゐる小春かな

山茶花の花を受けたる子の両手

生家に灯入れて座椅子の報恩講

北風に向かひ坂道歩きけり

午下り蒲団を干して子らを待つ

車椅子積んで冬野へ向かひたる

冬の畑一回りして戻りけり

花八つ手過ぎて橋へと差し掛かる

北風の吹いて裏木戸鳴りやまず

栗の枝切りて生家の冬支度

すみれ

柿紅葉小学校は上り坂

一枚の公孫樹落葉を手にしたる

枯鶯の方から鳥の声聞こゆ

寒鴉雲なき空に鳴き合ひて

北風に向かひ海まで鳥の飛ぶ

水鳥の一羽が群に加はりぬ

綿虫のよぎる窓から海を見る

八つ手咲きいつも子どもの通る道

杖の音遠くなりたる花八つ手

寒晴の海までの道歩きけり

知佳子

ふるさとの山の低きに冬の虹

冬の虹消えて再び架かりけり

母の寝る横で沢庵漬けにけり

沢庵を娘とともに漬けにけり

樽の底大根敷き詰め漬けにけり

寒鴉裏山の木の天辺に

茶牡丹を玄関先に植うるなり

実南天二本を切つて年用意

冬夕焼母の家から帰りをり

子の忌日経読む母や水仙花

ちどり

予備校にマイカーの待つ冬夜かな

絶え間なく波音ひびく冬銀河

冬鴉涙ぐむほど空真青

鉄橋の幾何学模様冬の空

バス停に人の来てる霜の朝

霜の花フロントガラスきらきらと

千両の築地の隅に実を付けて

あれこれと雑用ありて十二月

夕星や大根引いて畑あがる

臘梅の透くる花びらほどけたる

友岡葉山子

冬の月高速道を透けてあり

冬の夜帰宅の人の逆を行く

冬の水金魚のいない金魚鉢

壁のない五階北吹く駐車場

テーブルに数個並べる風邪薬

湯冷めして充電つなぐ夜の終わり

シャープと消しカス朝の炬燵かな

冬の海波止場へ行くと云う子供

夕暮の枯野に一番星浮かぶ

店員と前の人とがおでん詰め

ふじ女

叔母の待つ白山茶花の家を訪ふ

小春日の夫はどんだん先を行き

風に逆らつて飛ぶ大鵝

子を送り落葉の道を帰りけり

せせらぎをゆつくり落葉流れけり

ひと房の南天の実の垂れてをり

冬薔薇を育てる人に声をかけ

山風を受けて大根洗ひたる

おでん煮て厨の窓に風の音

室咲をベッドの母に置きにけり

海岸に野路菊の香の広がりぬ

堀越しに柚子の香れる家のあり

掃くたびに柵の花香りたり

黄葉の散り敷く音のしてゐたり

冬はじめ野辺吹く風の聞こえる

山茶花の垣根の奥に伯母の住む

郵便車落葉時雨の坂を来る

窓越しに聞こえてゐたる小夜時雨

遠山に日の差し始む冬の朝

冬椿一輪咲いて日のあたる

東雲の路傍にこぼれ草の露

朝礼の空を飛びたる鴈の声

灯台の道に弾みて鬼胡桃

あかつきに人影動く冬菜畑

小雪の眩しき空を見上げたる

通勤の轍に霜のきらめける

冬日かな公園に子の声のして

北風や巖に波の碎けたり

松葉蟹初水揚げと声響き

すき焼に父の帰りを待つてをり

松田裕子

美耶

森口良樹

曾祖父に皆で頼寄す敬老日

祖父のため鰯の刺身を買ひにけり

群雀飛んで木犀香りけり

秋めける叡山の道歩きたる

蹴り足は砂塵の中に運動会

校庭の照景や進路相談会

秋雲の横切つてゆく大公孫樹

千畳閣床に紅葉の映りたり

水鳥の水道橋に分かれたる

綾乃

冬瓜の煮物をつくり夫と食ぶ

野路菊の故郷の岸に咲いてをり

山茶花の散る花びらを掃き集む

風が残る木の葉を散らしたる

玻璃越しに公孫樹落葉の舞ひ上がり

散歩道公孫樹落葉を踏んで行く

初雪の勤め帰りの肩濡らす

食卓に夫婦で囲むおでんかな

年の暮久方ぶりの友と会ひ

大畑恵

大枝の桜紅葉に風の止む

川沿ひの桜紅葉をそつと踏み

丁寧に縄の干柿外したる

散歩道三羽の鴨の水輪見て

毛糸帽ふれて浮かびし父の顔

毛糸編む棒針ときに机突き

しばらくは毛糸を編んでお茶にする

薬缶の火止めてつきの毛糸編む

獅子舞の門門に人立つてをり

宮田保江

裏畑に斑に解けて霜の花

綿虫を波打ち際に見失ふ

短日の知覧に夕日見詰めたる

着ぶくれて満天の星仰ぎをり

寒昴夜明けの空の天辺に

息白く川辺の鷺を見てゐる

凭れたる石の隙間に冬堇

畑に出てをれば笹子の鳴きにけり

初咲の水仙に顔近づくる

山野ウタ

ひと雨の来さうな雲や石落咲いて

北の山あたりの晴れて初時雨

冬晴の橋を渡れば風の吹き

初時雨ゆるやかに船出航す

冬の空川面の色を変へてゆく

人去りし冬の公園通り抜け

荒波の入江に鴨の番かな

一山のひっそりとして細雪

大橋博子

転寝の夢に孫来て冬日向

小春日や亡き友の来て目覚めたる

山茶花の垣根の上の山白し

風や校庭に子と犬走る

寒椿添へて輪島の漆器展

冬紅葉あと一枝が残りをり

鰯起し鰯に船団戻り来る

英一

藪柑子生けて小瓶を置きにけり

千両の生垣の光仁淀川

束ねたる万両の実の零れ落つ

夜の明けて霜踏みゆける湯来の里

水鳥の羽眩しくて太田川

早朝の干潟に来たる冬の鳥

海見えてオリブの実の落ちにけり

榎植の実匂うて夜の深まりぬ

踏み石に散りし紅葉に小雨降る

自転車のペダルを踏んで木の葉散る

冬の日に少年の耳透けてをり

喪の服を脱いで座りし炬燵かな

庭の柚子風呂に入れてと子に送る

純白の菊を供へて夫の忌

藪柑子寄せ植ゑにして愛でにけり

千両は孫から届くプレゼント

踏み場なきほどに広げて賀状書く

はらからの遠くにありて年暮るる

上島康子

桑門わかこ

高嶋彌代

物干にかすかに残る朝の霜

雲の色映る川面や冬どるる

二粒の実の赤きこと藪柑子

リースからシナモン香る聖夜かな

園児らの背伸びしながら煤払

床の間を拭いて千両飾りけり

撫子

柚子味噌を炊いて裾分け一匹切り

短日を使うて山の仕事しぬ

山茶花の赤満開の道を行く

そこだけが華やいでるる冬薔薇

冬ざれの林の中の草いちご

紀英子

紅葉散る枝を癸ちたる朝の鳥

月蝕を眺めてゐたる冬帽子

菰巻いて松を見てゐる庭師かな

あけぼのや一文字刻む音聞こえ

落葉極く音で目覚めし朝かな

村上理江

霜踏んで登校する子薄日差し

赤き実を好んで食べて冬の鵜

庵へと続く小道の藪柑子

白い船遠くに見ゆる十二月

熊谷ゆり子

朝の霜我先と踏む通学子

洗ひたるカーテンの香や冬夕焼

年の暮家具の裏まで埃取る

水槽に重なり動くずわい蟹

山崎桂子

冬の日を多肉植物受けてをり

冬の空見上ぐればなほ雲低く

霜降りてペールをかけた世界なり

かこ

野の柿に雀百羽の来てゐたる

お茶室の竹筒に入れ実千両

初雪や友に電話をしてみたき

ちかこ

小春日の雑巾がけの捗りぬ

初雪の積りたる尾根巖島

藪柑子赤き実つけて登り坂

穂高

藪柑子卓上に置き古希迎ふ

山墓の千両の実のこぼれたる

一呼吸入れて散歩の冬の朝

みさ子

あかあかと尾灯連なる冬の暮

喪の景書じつと見つめる師走かな

一品に今宵たつぷり根深汁

やす保

江波山の落景踏みしめ散歩かな

火の番の子供の声が響きたる

阿波久

令和三年十一月度作品集より

友岡案山子 私の選んだ十句

備北へと暗れてゆきたる秋時雨	佐保光俊
山上湖色なき風の吹きにけり	村上正人
二十日月待つともなしに上りをり	高尾ひとみ
薄紅葉窓辺にそよぐ昼餼かな	秋 沙
冬の蠅一匹の居る夕餼かな	あ ぎ み
山裾に湖グレーに光る冬	ふ じ 女
冬祖母の便りは兄の文字	森口良樹
水たまり時雨の空を映しをり	大橋博子
まなざしの夫に似し孫菊香る	み さ 子
月さやか廚の灯り消しにけり	美 耶

ふじ女 私の選んだ十句

烏瓜ここに暮らしがあつた頃	佐保光俊
宵星に金木犀の香りたる	村上正人
真夜の窓開けて見上ぐる後の月	高尾ひとみ
チェーンソー止みたる山の暮早し	あ ぎ み
ちやんこ屋の大き提灯夜の長し	亜 矢
飼ひ犬のチョッキにあまた草の絮	英 吉
乱れ萩だれか通れば散りにけり	松田裕子
実石榴に蜂の来てゐる角の家	美 耶
冬祖母の便りは兄の文字	森口良樹
異国の妻戦死の義父の墓洗ふ	英 一